
バレンタイン

Granxie(エドワード)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バレンタイン

【Nコード】
N8563Q

【作者名】
エドワード
Granxie

【あらすじ】
今年もやってきたバレンタイン
俺、古藤 悠一と西金 ミリアが付き合って2カ月近く経とうとしていた

二人の关系到少し変化が！？
それでも甘い二人の関係には共感も？

（前書き）

シリーズ「俺の彼女はツンデレお嬢」
クリスマスの後、恋人になって2ヵ月
悠一とミリアの関係は相変わらずな・・・感じ

今年もやってきたバレンタイン

俺、古藤 悠一と西金 ミリアが付き合って2カ月近く経とうとしていた

クリスマスの地獄もそうだが

バレンタインはバレンタインで・・・地獄かも知れない

ミリアのチョコレートは・・・死人が出そうなくらいにマズイからだ
そんなバレンタインが今年もやってきた

20XX年2月 日

今日はバレンタイン前日

幼馴染から恋人に発展した俺達

だが、立場は相変わらずで・・・

強引なミリアにあちこち引っ張りまわされている

悠一「ミリア・・・今年もチョコ作るのか・・・？」

俺は両手いっぱい荷物を持ちながらミリアの後を付いて歩く

ミリア「当たり前前よ、作らないでどうするの？」

ミリアは当然と言う顔をしながら足早歩く

確かにそれもそうなんだが・・・

と思いつつも何も言えない俺がいる

ミリア「さ、急いで買って帰りましょ」

ミリアは俺を急かしては色んな店を見ていく

俺はその後を荷物を持ってただ付いて行く

悠一（俺って・・・なんかな・・・）

トホホな気持ちとはこんなんだろうか・・・

と思いつつもこのままでは激マズのチョコを食べさせられる恐怖の方が大きかった

悠一「・・・なあ、俺・・・今年はチョコいらねえわ」

最後の店で言った俺の一言は反撃の恐れがあるドキドキものだった
ミリア「そう・・・」

意外な言葉だった

いつものミリアなら確実に『反撃の一言』か『理由をしつこく聞いてくる』はずだからだ

ミリアがいつもと違うので調子が狂う

悠一「あ・・・おいしいなら別だけだな・・・」

頭を掻きながら調子の狂う空気を変えようとしてみた
が、そんなに変わった気がしない

ミリア「うん・・・考えておくわ・・・」

素っ気無くそして何を考えているかわからない

今日のミリアが気にかかる

それでも買物が終わりミリアの家に着き玄関に荷物を置く

ミリア「悠一・・・今日はもう帰っていいわよ・・・」

やはりおかしい・・・

悠一「ミリア、熱でもあるんじゃないか？」

そんな事を言いつつミリアのおでこを右手で触る

熱は思ったよりもない・・・

悠一「熱は無いな・・・」

何が原因なのか俺にはわからなかった

ミリア「もう・・・いいから帰ってよ!!」

いきなりのキレ加減

俺は逃げるようにミリアの家を出ていった

ミリアの家に戻る事も出来ず

俺は自分の家に帰ろうと歩いてた

悠一「なんだよ・・・ミリアの奴・・・」

いつものミリアなら仕方ないで許せた

けど、今回はちょっと不満に思う

悠一「・・・あゝ・・・考えても仕方ねえ！」

イライラを抑えつつ大声で一言叫んだ後
家には帰らずに大通りの方に向って走る

大通りに出ると虚しさが込み上げてきて走る足を遅くする

悠一「ミリア・・・」

虚しさのまま歩いていると二人の小学生とすれ違った
それと同時にフラッシュバックのように昔を思い出す
過去のミリア「悠一、一緒に帰るわよ」

過去の悠一「う、うん・・・」

あの頃の俺達を思い出すとずっとミリアに引っ張りまわされてたな
と思った

同時に頬を何かが伝う

悠一「あ、あれ・・・俺・・・なんで、泣いてるんだ・・・？」

思い出すのと一緒に泣いていたようだ

俺は涙を拭う

が、溢れた泉が止まらないように涙が止まらない

悠一「お、おい・・・なんで、止まらないんだよ・・・」

何度も何度も拭うがその度に涙が頬を伝う

ミリア「悠一？」

後ろからミリアの呼ぶ声が聞こえる

俺は振り向かず涙を拭い続けた

ミリア「・・・泣いてるの？」

優しい声をかけられて今にも振り向いて抱き締めそうになった

悠一「悪い・・・今は・・・放っておいてくれ・・・」

昔を思い出して泣いてたとは言えない

それどころか今言ったら俺は・・・

ミリア「悠一・・・ごめんなさい・・・」

ミリアが急に謝りだした

だが、俺は振り向くのを我慢している

ミリア「私・・・ここ最近、イライラして・・・」

話を聞いてわかった

女性特有の症状だと・・・

それでもそんな事も気付けずに思い出で泣いてた俺の方が恥ずかしい

悠一「・・・ミリア・・・今年もチョコくれる・・・よな？」

後ろのミリアに聞こえるように独り言を言った

ミリア「うん・・・ちゃんとあげるわよ・・・」

その一言の後ミリアが後ろから抱きついてきた

悠一「お、おい・・・恥ずかしいだろ・・・？」

まんざらでもないが・・・なんか恥ずかしい

今までではありえないからだ

ミリア「もう・・・今くらい、いいじゃない・・・」

少しだがいつものミリアが戻ってきた気がした

人目を気にせずに俺を振り回すいつものミリアが・・・

悠一「・・・チョコ、忘れるなよ？」

念を押すように言ってみた

ミリア「忘れるわけ無いじゃない・・・もう・・・」

そう言つてミリアは俺から離れた

俺が振り向くとミリアは帰ろうと歩いていた

俺はその後についていく

翌日

いつものようにミリアからチョコレートをもらった

悠一「ありがとな」

確かに欲しいかった

が、味の事を思い出すと少し不安でもある

ミリア「ちゃんと食べなさいよ？」

釘を刺された・・・

仕方なく俺は目の前でチョコを食べた

悠一「う、うまい・・・」

今までよりうまかった

もちろん、普通のチョコよりは苦いがそれでもうまかった
ミリア「当然でしょ、ちゃんと作っただから・・・」

目の前にいるのはいつものミリア

そしていつもの光景

だけど、いつものと少し違うバレンタイン

俺はミリアを抱き締めて喜んだ

ミリア「悠一、いきなり抱かないで」

顔を赤くして俺を引き離そうとするミリア

今年からは俺もミリアと甘いバレンタインを過ごせそうだと
俺はミリアを抱き締めてそう思った

(後書き)

お題小説「チヨコレート」です

クスリマスの続編を書きたくなったので書いてみました
ちよつとばかり微妙な気も・・・

まあいいかw

まだ続く可能性・・・あるのかなあ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8563q/>

バレンタイン

2011年10月8日12時28分発行